

平成 30 年度 第 2 回

学校評議員会／学校運営協議会

校長

副校長

教頭

開催日時	平成 30 年 10 月 13 日（金） 18 時 15 分 ～ 20 時 45 分		
場 所	秦野曾屋高等学校 東会議室		
司 会	副校長	記 録	石塚・川崎・山本
欠 席 者	小山田幸弘（秦野市立本町中学校 校長）		
1	開会挨拶（副校長）		
2	会長挨拶（三辻会長） 神奈川高校改革第二期が報告された。統合される高校もあるなか、曾屋高校が右上がりでもある。生き残りの時代であるため、今後の学校づくりをよりよいものにしようと強い意志を共有した。		
3	報告及び意見交換 (1) 体育祭・秋輝祭・寺子屋について ・体育祭は 6 月 1 日非公開で行われた。天候にも恵まれ、生徒も満足した内容であった。 ・秋輝祭は、9 月 8 日の一般公開で、約 1500 名の来校者あり。校内アンケートでも、9 割以上の生徒が満足と答えている。 ・今年度から始まった寺子屋では、ダンス部がキッズダンスの指導を行った。ダンス部 4 名がほぼマンツーマンでの指導を行った。また、8 月 4 日にキッズダンスに加え、読み聞かせを体験した。生徒もとても楽しかったと答えている。 ・今後、生徒が寺子屋に参加しやすいよう、日程や時間を調整していく。  (2) 夏季福祉体験学習について ・今年度、体験には 66 名の参加があった。部活動の合宿と日程が重なるなどで、昨年度より参加人数が少なくなった。3 年生の AO 入試受験も要因と考えられる。 ・報道等の影響で福祉の仕事は「きつい」などと考えられ、職業とするのは経験してからが良いという生徒が多い。しかし、実際に体験した施設に就職し、地元に戻って貢献している生徒も数多く存在する。 ・今回の資料は生徒の活動風景を掲載することができなかったので、今後は本校生徒の活動をより理解してもらうために活動風景の写真を掲載していきたい。		

### (3) 学校アンケートについて

- ・資料2の、3年生の2時間勉強している生徒は9.0%に訂正。
- ・曾屋高校に入学して満足している生徒の割合は、「おおむね満足している」が71%という結果が出ている。県全体の「平成29年度魅力と特色のある県立高校作りについてのアンケート」結果では、卒業生全体の83.9%が高校に満足していると結果がでているので、生徒が学校生活を、もう少し有意義に生活していけると、満足度が高くなると考える。
- ・生徒のうち44.3%が、秦野曾屋に誇りをもっている。しかし、5人に1人は否定的な答えをしている。自己肯定感の低下が原因として考えられる。
- ・4分の3の生徒は、曾屋高校は明るくて楽しい学校であると答えている。
- ・「悩みや相談に親身になって聞いてくれる教師がいるか」の問いについて、半分には及ばない結果が出ているが、例年よりも上がっている。これからも、生徒への対応を継続していけばおのずと上がってくると考える。なお、20%強は否定的な答えをしている。
- ・「学校が挨拶の指導に力を入れているか」については低下している。SOYAアクションプランでも提示した通り、活動を継続し、生徒が挨拶の活動に参加できるよう推進していく。
- ・「2時間以上勉強しているか」について、2年生については、県下と同等のレベルである。しかし、3年生の9.0%について、受験生であるにもかかわらず、低い状況である。早い時期のAO等で決めてしまうことも要因の一つで、学習意欲が低下していることが原因として考えられる。

### (4) 平成29年度E—提案研究発表について

- ・GAPについて、生徒の自己肯定感がどのように上がるかを調査してきた。
- ・SOYAフェスタ参加者の感想では、大変良かったと答えた割合が非常に高かった。
- ・コミュニティ・スクールへの教職員の意識については、職員の間で温度差があるので意識の共有を図る必要がある。
- ・家庭、地域、学校の連携については、小中学校に比べて希薄であることが見受けられる。
- ・地域アンケートの結果、地域の55%の方は、学校と地域の連携を高校に期待していることが分かった。ボランティア活動については、アンケートに答えてくださった地域の方のうち、半数以上がボランティア未経験者であるが、90%はボランティア活動に興味を示している。
- ・重点項目として、挨拶の実践、一人一ボランティアの実践が重要視されている。「挨拶」「お手伝い」「感謝」をキーワードとして取り組んでいく。

#### (5) その他

- ・「SOYAサポ事務局」の教員が、活動についての共通理解を図ろうという目的で望月委員、中山委員をお招きして、7月20日に研修を行った。
- ・たばこ祭りでは、ダンス部37名、軽音楽部40名が参加した。また、ボランティアには、幼稚園運動会の補助に1年生5名が参加した。本町地区ふれあい祭りにはダンス部27名がダンスの披露をした。ダンス部は、前述のとおり、寺子屋でも指導を行っている。
- ・地域連携の活動を通して生徒の自己肯定感どのように変化していくかを見ることを目的としてGAPを全学年で行っている。
- ・今後、韓国語講座を開講する予定である。望月委員の紹介で、講師を招くことができた。17名の女子生徒が参加を希望している。とてもやる気のある生徒たちで、講座が順調に進むことを期待している。

#### 4 各種報告についての質疑応答・意見

意見：曾屋高校は英語、福祉に力を入れている。柱として曾屋は福祉というイメージを捨てるか、イメージアップをしていくか、職員で議論していくべきだと考える。

意見：福祉人材の確保については、福祉職の評判をどうとらえるかが重要である。福祉職のウソホントを知ってもらえるよう、高校生にPRできるポスターを関係職員と作ったりしている。例えば、賃金は何をベースにしたら低いのかを明確にして伝えたい。また、今後曾屋高校の教職員と打ち合わせの予定もある。福祉の悪いイメージが先行しないように伝えていく。

意見：マスコミの内容などもあり、生徒はマイナスのイメージを持ったりするのでぜひ福祉をアピールして欲しい。

意見：体験した者がその施設等に戻って職に就くという事例もあるので引き続き事例調査をしてほしい。

#### 5 協議

##### (1) 「一人一ボランティア」の実践について

- ・今年度は特に挨拶に特化している。挨拶をどのような形で実践していくか、について教員でも集約してきた。年に3回、地域の方や生徒、教員が立って挨拶運動を行っているが、一時的なものになってしまう。成功している学校を例と

して、実績のある学校への聞き取り調査を行っている。

- ・まず、第一段階として、誰が来た時でも、進んで挨拶をする雰囲気作りをする。また、教員から生徒に積極的に挨拶することを習慣化させる。第二段階として、部活動や生徒会本部役員に、朝や帰り、面識のない人にでも挨拶をする活動をするよう働きかける。交通安全週間などを活用して、地域の大人と一緒に活動することで地域での人間関係も出来上がり、地域の方も話しかけやすくなると考える。
- ・落合交差点で地域の方が交通安全指導をしている。生徒も一緒に旗振りを行い、挨拶をすることによって、小学生やその保護者、サラリーマンの方等にも伝わり、生徒と地域の距離が縮まる期待をしている。

## (2) 地域防災活動について

- ・秦野市との災害避難協定は、平成 27 年 1 月に締結。これは地震災害に限ったもので、風水害に対応していないため、秦野市から見直しの提案があり、風水害の際にも避難所として使用できるよう改定中。
- ・夜間等避難用に秦野市に貸し出している鍵の確認作業を秦野市防災課の職員と 7 月に実施。開錠可能な場所の確認や体育館等の照明やトイレの位置の確認を実施。
- ・避難勧告発令時に当校は秦野市職員派遣先にはなっていなかったが、派遣先に指定予定。

## (3) 各部会について

- ・評価部会・地域連携部会によって部会長を選出したい。
- ・学校評価部会は、三社会長を筆頭に、地域連携部会は、橋本委員を筆頭に構成していく。
- ・地域連携部会は、福祉・防災のユニットに分かれ、地域と連携した様々な取り組みの企画・運営を行っていく。教職員は、福祉・黒木、防災・笹尾が筆頭となり担当していく。委員からは、福祉・小松委員、防災・橋本委員が筆頭となり執り行っていく。
- ・12 月に中間報告をし、3 月に向けた最終的な学校評価につなげてこうと考えている。

## 6 協議事項における質疑応答・意見

### 質疑応答

Q： 一人一ボランティアを実現させるための具体方策として、挨拶運動から入ることはわかるが、一人一ボランティアは何を目標として

いるのか？そこが分からない。

よく、曾屋の生徒は挨拶しないという人もいる。ゴミ拾いを地域貢献活動でやっていたと思うが、それらを地道に行っていくのも大切だと考える。

A： SOYAアクションプラン 2018 にも掲載している、一人一ボランティアについて、部活動単位で実施し、一般生徒は自主的取り組みとしているが、なかなか取り組めていないのが実情である。

一般生徒が参加するためには、まずは皮切りとして、挨拶が大切であると考えている。今年度はまずは挨拶を行うことが「一人一ボランティアへのカギ」だと考える。

7月20日の研修会をしたとき、地域の方と生徒には距離感があることを感じた。人間関係のない状態から手伝いなど入るのは難しい。挨拶をきっかけとして、地域の方と生徒の距離が近くなり、ちょっとしたことに気づき、お手伝いできたりする生徒を育てたい、というイメージである。いきなり手伝うように言うのは難しい部分があるため、挨拶から入ろう、というスタートを切ろうとしている。

意見： 活動実践内容について、とても素晴らしいと思う。社会から見て、児童生徒がどう見られているのか、を知ることは大切である。これからは、学力・リテラシーが重要視されていくことは明らかなので、どう育てていくかを検討していくべきだ。学校教育は何を目指しているのかを提示することができるといい。今回の報告によって、先が見えてきた印象がある。

意見： 挨拶の意味など指導案を作って、指導案をもとに担任の先生でアレンジしたら生徒も先が見えるようになる。ホームルームでどのように取り組んでいくべきか、を明確にしていけるといいのではないか。

地域や家庭にも協力を求めることについて、何の協力を求めるのか、自治会としてはどういうものに協力してほしいのか、学校としてどのように取り組んでいくのか、について家庭への啓発を考えたらどうだろうか。

学校新聞への掲載を活用し、生徒が継続的に一人一ボランティアを取り入れ続けていけるといい。一人一ボランティアについて新聞を通して考えられると意識も変わる。

意見： 「はい、ありがとう、すみません、ごめんなさい」といった「は

あすご運動」というあいさつ運動が昔はあったのにいつの間にか消えてしまった。継続的にやっていくことが大切であるのだから、曾屋高校の取り組みを皮切りとして広まっていけたらと考える。

意見： 広報をうまく利用する。『タウンニュース』を活用したらどうだろうか。子供たちも見ている可能性もある。子供たちにも挨拶しなければいけないのではないかと考えさせることができるのではないだろうか。

曾屋高校での取り組みを始めることについて、『タウンニュース』に掲載したら変わるのではないかと。具体的な行動の仕方が見えてきたら掲載したらよいのではないかと。活動結果など実績が出てきたところで依頼をすれば取り扱ってくれる可能性がある。

意見： 効果的な挨拶の仕方を、伝えられたらより明確になるのではないだろうか。調べて生徒に伝えてほしい。

意見： コミュニケーションのきっかけとなるのが挨拶。面接や入試でも挨拶が大切だ。というところから入ってスタートしていけたらいいのではないかと。

意見： 子供たちが新しい関係をどう構築していくのか、挨拶活動を通常の学習に位置付けていくことによって地域を変えていく力になるのではないだろうか。

地域の人たちとゴールを共有していくことによってゴールを目指したコミュニティ・スクールを作ることができる。挨拶は家庭環境も重要だと考える。

意見： 大人が考えた意義を生徒にしっかりと伝えてほしい。なぜやるのか、どんな目的があるのかについて話してほしい。教員だけでやらずに、保護者にも協力方法を提示してほしい。

周囲に取り組み内容について発信することは重要であると考え。取り組みの後の成果を、挨拶運動によって生まれたよい事例をたくさんつくるのが大切である。よい事例をとにかくたくさん作っていきたいと考える。

意見： 3年生の勉強時間について、低下していかないようにしていくべきだと考える。何か方策を考えるべきだ。

#### 質疑応答

Q： ボランティア活動の一環として、震生湖付近のやまゆりを植付けた場所あたりの草刈りと支柱植えに参加できるか。

A： 時期・日程にもよると考えられる。タイミングを見て募集をかけて人数を確保できたらいいと考える。

#### 7 その他

・今後の予定

● 12月15日（土） 第三回学校運営協議会（PTA運営委員会開催日の午後）

● 3月上旬 第四回学校運営協議会（年度報告・評価）

#### 8 閉会挨拶（教頭）

一人一ボランティアについて熟議が深まった。生徒は学校が何に力を入れているのかをすぐ感じ取る。どういうところにつながっていくのかを職員を通して伝え、取り組めるようにすることで、地域に根ざした学校になれるよう努力していきたい。